

ひとの知恵、動物のことは

勝村弘也

奨励者紹介〔かつむら・ひろや〕
神戸松蔭女子学院大学名誉教授
ウイリアムス神学館教授、旧約学者

獣に尋ねるがよい、教えてくれるだろう。
空の鳥もあなたに告げるだろう。
大地に問いかけてみよ、教えてくれるだろう。
海の魚もあなたに語るだろう。
彼らはみな知っている。
主の御手がすべてを造られたことを。
すべての命あるものは、肉なる人の霊も
御手の内にあることを。
耳は言葉を聞き分け
口は食べ物を味わうではないか。
知恵は老いた者と共にあり
分別は長く生きた者と共にあるというが
神と共に知恵と力があり
神と共に思慮分別もある。

(ヨブ記 12章7―13節)

人間と共生する動物

最近、私は奈良市の北の端に引っ越しました。自宅から500メートルも歩くと、田園が広がっています。このあたりには溜池や古墳が点在しており、緑が豊かで、早朝からさまざまな鳥がさえずります。早春の或る日の夕方、散歩中に溜池のそばを通ったら、ツバメの大群が池の上を飛び回っていました。自転車を停めてその様子をじっと観察している老人がいます。その方の話によると、このツバメの群れは今年の第二陣なのだそうです。ツバメたちは遠い南の国からこの池の上まで飛んできて、長旅の疲れを癒すために水を飲み、人間にはよく見えない小さな虫を捕食します。これからツバメたちは、分かれてそれぞれ巣を作り、卵を産み、子育てをし、帰る時はまた同じ池に集まって群れをなし、南の国へ帰って行くのだそうです。

ツバメは、大昔から人間と共生している動物の典型的な例です。以前は、たいていの駅の改札口の天井にツバメの巣がありました。私が育った西宮にも、いたるところに田んぼがあった時代です。夙川駅にも西宮北口駅の小さな駅舎にもツバメが巣を作っていました。少年時代には、親鳥が餌を運んで巣に飛

び込むと、雛たちが口を開けて叫ぶ様子を電車が来るまで面白く眺めていました。ツバメが落とす糞のようなのは、駅員が出てきて時々掃除をしていました。心が和む光景でした。ツバメと稲作農民には長い共生の歴史があります。ツバメは人間が自分たちを守ってくれることを知っているのです、農家の軒先のような人間の生活圏に巣を作ります。農民にとっては彼らが稲などの害虫を捕食してくれるのでありがたいのです。旧約聖書の詩篇84篇4節には、神殿の祭壇のそばにツバメが巣をつくり、雛を育てる場面が出てきます。いつも神様のそばで生活する鳥だというわけです。

民俗学者の野本寛一は、『生態と民俗 人と動植物の相渉譜』（講談社 2008年）の中で、色々な野生動物と人間の共生関係について考察していますが、最初に出てくるのがツバメです。この本には鹿、猿やウミガメなどが登場しますが、非常に興味深いのが奄美大島で暮らす人々とハブの関係です。いうまでもなくハブは猛毒を持つ危険な蛇ですが、奄美大島の人々はハブを有益な動物と考えていました。砂糖キビを食い荒らす野ネズミを駆除してくれるからです。野生動物にはハブのように人間にとって両義性をもつものもいるわけです。

環境問題への自覚と聖書の読み直し

私は旧約聖書の専門家として、生物学者ではありません。ここで聖書研究の歴史を少しばかり振り返ってみます。20世紀の中頃には「旧約の中心」をめぐる神学論争がありました。新約にはこの種の議論はありません。イエス・キリストが中心であることが自明だからです。旧約は分量が半端ではない上に内容的にも非常に多様で豊富です。ユダヤ教の正典でもあるこの古代の文献から、私たちが思想的に何を最も重要な事柄として取り出せるのか、という問が生じたのです。旧約にはそもそも「中心」なんか存在しないと考える著名な学者もいましたが、「中心あり」とする者が、どういう事柄を中心とみていたかと言いますと、それは「神の唯一性」「イスラエルの民の救い」「王国とメシア」といった具合です。細かい議論を抜きにしてまとめますと、どのような立場をとるにしても、旧約は全体としてみると「歴史書」だとする共通認識があったと思います。つまり天地を創造された神への信仰とか、神の自然支配のようなものを中心とする学者はいなかったのです。これらは旧約神学の周辺に位置づけられていました。

ところが1970年代頃から状況が大きく変化しました。環境問題が人類社会にとっての重要な問題として意識され始めたからです。人間が利用する「資源」には限界があることが自覚されるとともに、人間が自然を収奪しているという反省が生まれ、同時にこのような自然破壊をキリスト教（特に近代の西方教会）が正当化してきたのではないかとの疑問が生じたのです。従来、神学者たちが「自然」をまじめに取り上げてこなかったという反省と同時に、聖書の読み直しが起こりました。この関連で、天地創造、ノアの方舟などを含む創世記の冒頭、神の宇宙支配を賛美する詩篇（19篇、104篇、148篇など）、ヨブ記、雅歌などがさかんに研究されるようになりました。このような研究はまだ途上にあるので、聖書の概説書ではあまり取り上げられていません。おそらく大学におけるキリスト教教育の場でもこのような問題に対する対応はまだ不十分であると思います。

人間に語りかける被造物の声

さて、今回取り上げるヨブ記12章は、重い皮膚病に罹って苦闘するヨブの元を訪れて、的外れな論争を

しかけてくる友人たちに対するヨブの応答の部分です。7～9節には以下のようにあります（引用は私訳による）。

しかし獣（ベヘモット）にたずねてみよ、それはあなたに教えるだろう。

また空の鳥、それもあなたに告知する。

あるいは地の灌木もあなたを教えるだろう。

海の魚もあなたに語るだろう。

これらすべてのもののうちで、誰が知らずにいようか、

ヤーウェの手がこれを造ったことを。

ここでは「教える」「告知する」「語る」という同義的表現が繰り返されます。神に造られたすべての生き物が、人間に向かって何かを語っていると言うのです。私たちはこのような生き物のことばを理解しているのでしょうか。獣や鳥や魚のことばは、もちろん人間のことばのようなものではありません。数年前から私は猫を飼い始めました。現在3匹います。ニャーとしか言っていないようでもあります、たしかにいろいろなメッセージを発信していて、「飯をくれ」「汚れたトイレをきれいにしろ」「遊んで、遊んで」などと言います。ニャッと少し口を開けて、“I love YOU”と言う猫もいます。猫たちが互いに話していることばもあるようですが、これはまだよく分かりません。この種の「ことば」について考える際に問題になるのが、詩篇19篇です（引用は私訳による）。

天は、神の栄光を物語り、御手のわざを穹天は告知する。

昼は昼へとことばを湧き出し、夜は夜へと知識を伝える。

話すことなく、語ることなく、

その声は聴かれることはないのに、

その響きは、全地に出て行く、

その言葉は、世界の果てまでも（詩篇19篇2～5節前半）。

2～3節には、「物語る」「告知する」「ことばを湧き出す」「知識を伝える」と同義的表現が繰り返されます。このようなことばは、人間のように「話すことなく、語ることなく」、人間によって音声として聴きとられることはありません。これは太陽、月、星のような天体の発する独特のことばです。現代人ならば、このようなことばを数式で表現したりします。あるいは電波として認識するのでしょうか。5節の「その響き」と訳した語を their music と訳している聖書があります。古代ギリシャの哲学者ピタゴラス（彼は音楽家でもありました）のような人は、天体が音楽を奏でていると考えましたから、この箇所でも同じようなことを問題にしているのでしょうか。「彼ら」つまり天体が何を物語っているのかというと、「神の栄光」です。ヨブ記12章では、「ヤーウェの手」が問題になっていますが、この手は、すべての生き物を創造し、また保持している「神の手」です。この神の支配をすべての生き物が証言している。あなたは、そのことが分かっているのか、というのがヨブの発言の趣旨です。

ところでヨブ記12章7節で「獣」と訳したヘブライ語は、ベヘモット（複数形）です。ヨブ記を読み進んでいきますと、これと同じ表現の「ベヘモット」が40章15節に出てきます。ヤーウェ神がヨブに直接語りかける場面です。15節以下に登場する不思議な動物の名前がベヘモットです。単数形の「獣」を表す語をわざと複数形にしています。このような複数形は一定の抽象的な観念を表しているとも解釈できますが、

神はこの不思議な動物を巧みに描写しています。ベヘモットを口語訳は「河馬」と訳しましたが、新共同訳は「ベヘモット」と音訳しました。この動物は、ナイル川に生息する河馬のようでもあります、少し違うようでもあります。40章25節以下には「レビヤタン」が登場しますが、この動物のモデルは、ナイル鰐(ワニ)だとされています。河馬も鰐も、人間には何の役に立つのか分からない動物であって、これを飼いなすことは不可能です。ヨブ記を書いた詩人は、自然のもっている驚異的な力をこのような想像上の動物として、詩的にまた戯画風に造形化して見せたのでしょう。12章で主人公のヨブは、動物の発するメッセージについて語っていたのですが、このような人間には恐ろしい自然の巨大なパワーについてはよく理解していませんでした。ヨブは、このような自然界に存在する圧倒的な驚異(ヘブライ語でいうニフラオット)について知らされて、この時まで雄弁に語っていた口を閉じてしまいます。

人間は、神の造られた世界についてよく知っているつもりになり、そのことで随分傲慢にふるまっています。何でも人間に都合のよいようになるものだと思込んではいないでしょうか。しかし、この宇宙は、人間のためだけに創造されたものではありません。私たちは、地震や台風のような自然が本来もっている巨大なパワーに遭遇すると、神様に文句を言いたくなります。聖書はそのような人間の発する嘆きのことを否定してはいません。神様におおいに苦情を言ってよいのです。しかし、その前にひとは自分の能力には限界があることを悟り、謙虚にならなければならないのです。

2018年7月25日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録